

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成 22 年度派遣報告書

—ラオス人民民主共和国・ラオス国立大学・ラオス語・H22.8.1-H2211.10—

平成 22 年度入学
大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
博士課程 1 回生
佐野航平

自身の研究テーマについて

山間地には低地、斜面地、丘陵、河川、森林など多様な自然、地形環境がある。その多様な環境にラオス北部の住民は水田稲作と焼畑、そして家畜・家禽飼育、漁労、非木材林産物採取など様々な生業を組み合わせて対応してきた。しかし、現在では政府が焼畑を停止させ、焼畑の代替として商品作物栽培を普及させようとしている。それに伴い在来の生業との間に問題が起きている。例えば農薬の使用と家畜・家禽飼育の両立が困難であり、また山地を商品作物栽培のために開墾し、非木材林産物の枯渇が心配されている。収穫物は周辺の国に輸出され、商品作物栽培は外部市場に依存している。商品作物の輸出が何らかの原因で停止される、国際市場価格が下落するなどの可能性もあり商品作物栽培に依存した農業だけではラオス北部山間地の農民が安定的、持続的な収入を得られるか疑わしい。

よって本研究テーマの農業集約化において焦点をあてるのは、農業と他の生業の複合による利益の安定化とその利益の持続である。山地民の在来の生業と、商品作物栽培などの近代農業双方を組み合わせることによって利益の安定化とその持続が達成できる可能性を示したい。

研修言語の概要

ラオス語はラオス人民民主共和国の公用語である。言語系統的にはタイ＝カダイ語族のタイ諸語の一つである。ラオス語はラオスの主要民族であるラオ族の母語ラオ語と同一であり、ラオ語としては他に東北タイで話されているイサン語も含めることが出来る。声調言語であり、有気音と無気音、母音が 14 ある点が日本語や英語とは異なる。ラオス語はインド系のラオス文字によって書き表される。

語学研修の内容について

ラオス国立大学文学部ラオス語学科の教師の講義を受講した。2人の教師が毎日交代で指導した。当初は一日3時間、週5日間のスケジュールであったが、10月4日から一日2時間、週5日間で受講した。生徒一人、教師一人の授業で、教科書はラオス語学科が作成している外国人用のラオス語教科書を使用した。そのため発音や挨拶などの基礎的な事項から始まり、最後の教科書では政治や文化などに関する長文が載っていた。

教科書は一つのテーマについての章の中に会話文や文法、長文、そして練習の項目がバランスよく配置されており、教科書に則って授業を進めてもらった。予習は単語の意味をあらかじめ辞書を用いて調べ、復習は教科書の練習問題を解いた。解らない点があった場合は授業中に先生に質問をし、説明していただいた。また授業中で空いている時間があった場合自信の研究テーマである農業についての話や、関連する単語を教えていただいた。また語学研修最後の2週間は現地新聞の中から農業に関する記事を

選び、読解した。解らない所は解説してもらった。

研修期間中の印象に残った体験・経験

ラオスは国民の大半が上座部仏教を信仰しており、仏教に関する祭事が多い。研修期間中の8月～11月にもホーカオサラークや雨安居明けなどの祭があり参加した。ホーカオサラークは死者、特に親戚の死者のために祈る日である。雨安居明けは雨季の安居が終わる日である。どちらも早朝から老若男女に関わらず多くの人が寺に集まり托鉢を行っていた。またどの人も僧侶に敬意を持っていた。日本では感じにくい仏教をラオスで強烈に感じた。また大乘仏教や、日本の仏教を説明するとその違いに皆一様に驚いた。しかし五戒など共通する部分もあり遠くの国同士で同じ宗教を信仰していることに改めて驚いた。

他に友人の故郷に連れて行ってもらい、ココヤシの実や川で採った魚を頂いた。その友人だけでなく多くの人から自然が一番良いと言っており、自身のテーマである農業の目指す到達点は何なのか考えさせられた。

目標の達成度や反省点に着いて

ラオス語の文法は日本語や英語と比べ難解な点は少なく、語順を間違えて指摘されるぐらいであった。そのため読み書きは時間があればできるようになった。しかし声調や発音が初めての事項が多く難解であった。そのため話すことと聞き取りは目標に到達していない。声調は方言によりかなり異なり、語学研修の行われたヴィエンチャンと調査予定地として考えているラオス北部でも異なると考えられ、引き続き多くの人のお話を聞き、慣れなければならない。



ラオス国立大学文学部の先生



授業は文学部の教室で行われた



ラオスの大学では生徒は白シャツを着なければならない校則がある